

會



報

1963年4月

226

日本山岳会

学生登山に対する方策

社団法人

日本山岳会

このところ学生登山者の相次ぐ遭難が注目のまとなっている。わが国における近代登山の歴史は主として学生登山者によって築かれてきた。ヴァリエーション・ルートの開拓、積雪期登山の主要なものはほとんど戦前における学生群の手によるものであった。

こうした輝かしい歴史を持つ学生登山者が、昨今、初歩的な遭難を次ぎ次ぎにひきおこしている。ことに積雪期登山における遭難の増加がいちじるしい。

美しい日本の山も、端的にいえば、世界でも第一級の悪場なのである。山登りをはじめてわずか、三、四年の経験者の手に負えるものではない。伝統ある一流の大学山岳部であっても、日本の冬の山を立派にこなすのは、容易ならぬ問題を含んでいる。重要な計画の際には、十年ほどの経験を持つOBが直接指導に当るばかりでなく、さらにその上の二十年、三十年という大先輩が眼を光らせ、毎年の指導方針や運営に無理のないようにチェックしながら、大過なく計画を遂行しているのが現状である。それでもなおかつ時に破たんを招いている。それほど日本の冬山は、複雑で危険な要素を多分に含んでいる。

気象の型をとりあげてみただけでも、日本の冬山の天候は、初心者にとさら油断をあたえておいて後、猛然と襲いかかるといった悪質のものであり、天候のおだやかな日には、まことになごやかで女性的な山が、数時間後には、人間の行動を許さない白魔の世界と化するのである。しかもその悪天候に気を奪われている隙をねらい、進退の判断を行なういとまもなく雪崩が荒れ狂い始める。

体力を向上し、技術を練磨し、知識を習得するといったことは、学生にとって、その気になさなければ難しいことではない。しかしこれだけでは、冬の山から無事に戻れない場合があるのだ。ここでは複雑な状況変化を身をもって経験した上での判断力が必要なのである。

十年程の、まともな冬山登山の経験者なら、ひと通りの特殊なケースに遭遇するし、その異常な場面でのぞんでも一応の処置をとって切り抜けることができる。しかし新制下の大学で冬山のリーダーシップをとるのは主として三年生古くても四年生ということになりパーティの主体は、二年、または三年の冬山経験者である。これでは当然無理が予想される。その上

最近の傾向として、大学院に残ったり、留年する四年以上の経験を待つ部員がおりながら、いわゆる四年以下の現役部員と遊離するといった、好ましくない面も生じている。

このような現状で大学山岳部を放置しておけば、今後ますます不祥事の続発が予想される。

これの対策としては、登山行動にある種の制限を加えるか、もしくは、行動を無理なく実行し得る指導面を強化するか、この二つである。若きにあふれる進歩的な学生にとつて、その行動に制限を受けることは、耐えがたいことである。一方指導面の強化も簡単には実現し難い問題である。

長い伝統を持つ大学山岳部の場合でも、OBの学生に対する指導は、各種の困難な問題を伴っている。歴史の浅い大学山岳部では、創立当時のOBはレヴェルの低い段階の経験者で持たず、年々より高度の登山を目指してきている結果、OB団としての指導力に不足しているところもある。

全国的な学生登山連盟を組織しおたがい横の連絡をとりつつ、指導ができれば、まことに理想的である。しかしこうした組織が軌道に乗るには、かなりの時日をみなければならず、準備不足のまま形式だけととのえても、枝も根も生えないことは、過去のいくつもの事例が示している。

動面から出発すべきであろう。要は、くだらぬ事故を最少限に未然に防止し、健全な登山の発展に少しでも寄与するというのが目的であり、ことに大学山岳部の登山というものは、学生スポーツという広い視野からみれば、大学教育の一環をなさねばならない問題でもある。

このような観点から、本年度における本会学生部としては、まずOBの組織化を実現したいと考えている。従来学生部運営上の難点は、実務担当の学生が毎年交替する結果、一貫した方針が確立しがたく、委員長も、自校の問題を処理した上でのことなので、活発な行動は期待できないのが実状であった。従って本年度は学生部に対するOBの協力を強く要望し、その組織化が進めば、指導面の強化も可能となる。やがてこれを土台として学生山岳連盟の結成をはかりたいと希望している。

次に、全国的な大学山岳部の実態調査のため、文部省体育局の協力により、目下アンケートを集計中で、四月中にはまとまる予定であるから、これを検討のうえ、学生登山指導の資料としたい。

なお、本会としては、従来より不特定に指導の希望があれば、極力これに応ずる方針をとっており学生登山の面においても、この点早急に充実強化する予定である。学生登山における指導組織の確立をみない現在でも、求めれば道はある、ということを確認する次第である。

昭和三十八年四月

地名と当て字

武田久吉

言語と文字

人間同志互に意志を通じる最も大切な方法は言葉である。それを書きあらわす大切なものは文字であること申すまでもない。日本には昔から言葉はあったが、残念ながら文字がなかったから、漢字が伝来した時の驚きと喜びとは計り知れない程であったに違いない。

よいのだが、訛ってしまつて、手のつけようのないのが少なくない。グランド シートというから大きなシートかと思うとグラウンド シートであつたりして、笑話にもならないことがある。

一方漢字全盛時代には、音を仮名で写したのでは有難味がないから、少くとも名詞は漢字で書くことに力を注いだ。その場合意識と音訳と両方あること、丁度シナで外国語を漢字に写した場合と同様である。

例えば「Raphanus」をシナで音訳して「菜菔」、「蘿蔔」、「蘆薈」などとやった。これは根の太い植物であるから、日本では昔は「おおね」と呼んで、大根と意識し、今それを音訳して「だいこん」と称する。

日本には「ゆり」の類が多いがこの名はどういう意味なのか、又どここの言葉が判らない。処で、シナではその鱗茎は多数の鱗片が合わさっているという意味で、「百合」と呼ぶ。それで、日本では、「百合」と書いて「ゆり」と読む

が、これでは「ユリ」と書いていきなり「ゆり」と読むのと同一轍である。又果実を食べる「あんず」はシナ名「杏子」の唐音をそのまま呼んでいる。

例はいろいろまたいくらかもあるが、この位で打ち切ることとして地名の方に移ろう。

地名と当て字、「五郎」

野口五郎、黒部五郎などの「五郎」は、明治時代の地図には「五六」と書いてあった。これはゴロ一ではなくて「ゴロ」である。石がごろごろしているという意なのを、それがよく理解出来ないか又は旨い字がない為か「五六」とあて、更に「五郎」となった。

塩山の奥の雲峯寺の裾あたりと同じ様な意味から名の出来た「ゴロタ」に、近頃の地図では「五郎田」と書かれてあるのを見て、微笑を禁じ得なかった。

「大天井」・「横通り」

大天井岳は、もと「二の俣のお天上」であった。「お天上」は高みとか最高点の意。それが「おおてんじょう」となり、更に文盲連によつて「だいてん」などと呼ばれるのは、沙汰の限りである。

「横を通り」という地名を、始めて吾々に報告したのは、たしか小島鳥水君であつたと思う。最初は「横尾鳥」と当字されたかと記憶

する。

「花見」という地名

小島君といへば、山岳会が設立された年の翌明治三十九年（一九〇六年）の八月一日、常念岳を目指して東京を発し、上諏訪に一泊してから翌朝明科駅に下車、北穂高村の青木花見に、清沢家を訪ねた。往来の人に道順を尋ねたのであるが、「土地の人はアヨキミと言って、花の字を略して呼んでいる」と小島君は書いていたが、これは聞き違いで「アヨキケミ」といったに相違ない。

「花見」と書くのも「ケミ」に対する当字で、この近くの特殊の地形を現わす言葉なのである。試みに陸奥五万の「池田」を見れば、単なる「花見」から、「田花見」、「唐花見」など、四五箇所記入してある。これは元来どこの言葉か知らないが、湿地の意味で「唐花見」の所にはその記号さえある。

これはその当時初耳であつた鳥水君にして見れば、無理からぬことであるが、昭和十八年五月に、青木書店から出した「山谷放浪記」に、昔の紀行に手を入れて掲載した時、何故こんな手近に得られる地図を参照して、適宜加朱しなかつたかおかしいので、批評を気にする小島君としては千慮の一失とでもいうところであらうか。地

図には振仮名があるではないか。

「熊人原」

この紀行文には、も一つ面白い当字がある。清沢家に一泊した翌朝、横沢類蔵を案内として山に向う。有明村（小島君の謂う有明村竹ノ果）にある類蔵の家を後にしてから、「鍋冠の裾に引く大原——名もおそろしい熊人原（宛字）に出る。」とあるその原の名が、これも「放浪記」には旧版のまま載っているが、私達のようなあの頃の若僧には、成程恐ろしそうな名と響いたが、昭和の聖代までには、少しは知恵もついて、それは実のところ「熊野堂原」が正しいので、熊野権現を祀った堂の在る原に違いない、と悟った。この名は地図に見えないようだが、著者の加筆の漏れたことは、戦争末期の混乱時代の故であらうか。

「ショウズ」・「タキノ」

他人の事はかり書いているようだが、私も曾て馬鹿氣た当字をした思出がある。明治三十八年八月初めて白馬に登った時、携帶の地図は輯製二十万の正確なものだけだから、白馬岳の他には山名は一つも記入してない。山に詳しい笹の夫丸山広太郎が誰よりも頼りなので、杓子、鍬以外の山名を尋ねると、鹿島鎗ヶ岳を、南大黒

北大黒と教えて呉れるし、旭岳を「シヨウズ」だという。「字は？」と尋ねたら「なめる塩ずらい」と答えるので、仮に「塩頭」としたなど、滑稽も亦甚しい。

山麓から白馬尻まで行く間に、「タギゾーレ」という地名があるので、意義を尋ねると、瀑が幾本も揃って居るからだという。中には「瀑反」と当字した人もあった様だが、あれは「瀑ゾーリ」で、焼畑から出た名に相違ない。

もう少し白馬尻に近いあたりに、「長走沢」というのがあるが、これは沢尻が長いから「長尻沢」の意だと聞いた。恐らくこれが正しいであろう。

「景鶴山」・「八木沢」

こういう訛語から飛んだ当字をされてしまい、今更正に戻すことすら出来ないのは、尾瀬の「景鶴山」で、いつ誰がああいう当て字を敢てしたのか判らないが本来は「へーずる」であるから、「這摺山」でなければならぬ。その上、無智な輩は「けいかく山」などと読む。

利根川の上流や尾瀬に、「八木沢」と呼ばれる沢がある。勿論「八木」は「やぎ」と読むのだが、この文字には何の意味もあるのではない。昨年秋季尾瀬でいろいろ研究して見たが、これは「柳沢」の

つまったものであることを発見した。トカチヤナギ（方言ヤスマトヤナギ）のような巨大な柳が多数生ずるような沢にこの名がある。

「柳」を「やぎ」と読む地名としては、後閑から三国街道を大分西に行った山側の部落に「柳沼」というのがあって、これを「やぎぬま」と読む類例がある。

「大障子」・「大栗」

谷川連峯中、上越境上に越後側で「大栗」だの、「大障子」などと呼ぶ地名がある。「大栗」は大槲とか、大枋などのように、栗の大木にでも由るのかのように思われるが、海拔高から言って、栗ではなさそうである。実地に臨んで見なければ何とも言えないが、この「クリ」は「クラ」と同じく石のことかとも思われる。東京で割った石の事を「わりぐり」と呼ぶのと一脈通じている。

「大障子」に至っては聊か変である。まさか山中に大きな障子が立ててある筈はあるまい。これは多分シオジの木にでも由来するのではあるまいか。尤も本場のシオジであるか、それとも場所柄、ヤチダモであるか、調べて見なければ何であるか言明は出来ない。

「けいづか山」

日光白根に近く「磐塚山」というのがあるが、えらくむずかしい

字を使ったものだ。群馬県の利根郡では、推肥場の事を「肥塚」（けいづか）と称する。この山が概形、肥塚に似ている為にこんな名が出来たのではあるまいか。

それから考えると、荒船山の最高点の「京塚」も「きょうづか」ではなくて、「けいづか」と読むもので、意義は肥塚類形というのではあるまいか。誰かこの疑問を解いて下されば幸甚。

「又白」・「徳沢」

上河内（俗称、上高地）には、人名に由来する谷や沢の名がある。

「又白」の如きは「又四郎」に相違ない。「徳沢」は損徳には関係がなくて、「砥草沢」であったのが、今のように訛ったのである。それは明治時代の記文を見れば判る。あそこには、トクサが稀で、僅か許りあったのが人の注意をひいたのがもとで、今ではもう絶滅したことであろう。

北海道の地名

北海道の地名は多くは当然アイヌ語であるから、漢字のないのは勿論であるが、それにどうやら漢字を配したのは、松浦竹四郎の努力の賜物と、漢字崇拜時代には大いに賞讃されたものだが、今日とってはそれが少なからぬ殃をなしている。

多くは音訳であるが、札幌（竹四郎は察幌の字を用いた）などはまだ好い方で、ハチャムに発寒の漢字を当てた為、ハツサブと読まれたり、ツキサップを月寒と書いたのを、今ではツキサブと読む無学な人間が多い。

「しりべし山」

とかく滑稽な例となるのは「後方羊蹄山」である。日本山岳会編の「山日記」一九六三年版九二頁に、これを「しりべし山」として「しりべし」と読ませてある。「後方」と書いて「しりべし」、「羊蹄」の二字で「し」と読む可きものだから、全体で「しりべし」であるのを、

「後方」だけで「しりべし」と読ませようとした為に、あとの「羊蹄」の始末に困って、音読したので、誤が分らなくなってしまう。

後方羊蹄山の本当の意味も読み方も判らないとなると、それが長すぎるという処からだろう。半分に切って、羊蹄山と呼ぶ者がある、

そしてそれが本当の名だと思っている者も少なくない。大正の晩年に近く、有珠山の北麓、洞爺湖の南岸の床丹の旅館に二三泊したことがある。楼上から湖の彼方に後方羊蹄山を望むというので、その意味の名をつけようとしたものの後方羊蹄は勿論、羊蹄でも長すぎ

るので、之を更に半分に切って羊だけにしてしまい、望羊館と名付けてさまで得意らしかったのには、あいた口がふさがらなかった。

シリベシ岳を明治時代以来マツカリヌプリと呼び、これが正しい名だという。これは多分は、その南麓を西流するマツカリベツという小流から導かれた名と思うが、維新前には、松浦竹四郎の「後方羊蹄日記」（安政六年）によるとマチネシリ（雌岳）と呼んでゐる。

これはその東南に坐するピンネシリ（雄岳）に対してであるが、雌岳の方が雄岳よりも遙に高く大きいとは変った命名である。

同書の巻頭に掲げられた凡例に「知別は西蝦夷磯谷の県に有て川上は岩内、蛇田、白三ヶ場所入交の嶺場なり。其地を後方羊蹄と称し、其訳は広大無辺、高く限り無を言ひ。土人は是を雌岳と云、并て雄岳と云有。云々」と説明してある。雄岳とは陸測五万の地図にある尻別岳の事である。

竹四郎は安政五年正月十八日（一八五八年三月三日）

「早発積雪埋屋溪水すべて凍合し路頭砥の如し。馬蹄未だ通行路の辛酸言の及ぶ所にあらず」と記している。二十日夕山越内に着き、つづいて、――

「廿二日発到^レ静海^{シヅカ}各嶺^{オノノリ}を着、山に懸る。九折する処皆樹梢を踏て登る也。然れ共谷埋れ、峽も平に成が故、上り下りも常より少し。曲れる蹊も直くに成、実に雪に隣^{ナリ}の近き山里の詠等思ひ出して行けるに、如何にも着馴れる機に脚を蹴合せ、歩行遅なわり、余程夜に入て礼文木の会所に着しぬ。濤声^{タウシ}鞆^{タヌ}として夜不寐」

(後方羊蹄日記)

とある。竹四郎はそれから舟で虹田に到り、翌日湖水を一見して白会所に着。その後この附近を探検の後、二月になって後方羊蹄に赴き、同四日、マチネシリ(雌岳)に登った。その登山記に言う、

「知別岳者、其高、甲蝦夷、形似富嶽、故称蝦夷富士、以其在知別河上故名、土人喚之雌岳、雄岳在其傍、高不及雌岳之半、此書記所謂、後方羊蹄者也、蓋齋明之朝置政所之旧址、知別即後方羊蹄転音也(下略)」

(後方羊蹄日記)

シリベツは本来は川の名で、訳して大高川という。その川に由来したシリベツ岳を、竹四郎はシリベシの転音だと説く。然れば即ち雄岳がシリベシ岳という事となる。

とはいえ、竹四郎の略図(同誌四枚表)を見ると、雌岳の方をシリベシ山と考えていたかに思われる。

明治三十九年(一九〇六年)四月八日、日本博物学会同志会の第六回総会の折、来賓として臨席の蝦夷富士登山会々長河合篤叙氏が、「マツカリヌプリ山ニ就テ」と題して、講演されたが、同氏の説く

処によれば「マツカリヌプリは雅名を蝦夷富士と称し、俗にシリベシ即ち後方羊蹄山を以て称せられしも、シリベシなる名は甚疑はしきものなり。シリベチ川(アイヌ語にて高所より流る、河の義)の辺をシリベチ野と称す。往時阿部比羅夫がシリベチ府を置きしも此の辺なるべし。此処に二山あり、一は即ちマツカリヌプリにて一に雌山と称せられ、他はシリベチ山にして雄山なり。此は前者に比して甚だ小なり。而してシリベシなる名は恐らくシリベチの訛称にあらずやと思はる」とある。此の時以来私は後方羊蹄山の名を用いないことにしている。

「シリベシ」に「後方羊蹄」の文字をあてたので、この言葉が「後方」を意味するかの錯覚を起し易いが、マツカリベツこそ後から取り巻く川という意だという。そんな事もあるから、山名に「後方羊蹄」を用いるよりも、「マツカリヌプリ」か、それが嫌なら「蝦夷富士」と呼んだ方が混乱の憂がな

いかと思われる。

「ニセイコアンヌプリ」

シリベツ川はマツカリヌプリの

北を廻流してから、クッチャンの南で向きを南にかえ、カリプトウで更に西に向かう。函館本線はこれに沿うて走る。

コンボ(昆布)駅の東約六キロの地で、北から注ぐ小流「ニセイコアンベツ」は、絶壁にある川の義で、その源流の東にある峯は、「ニセイコアンヌプリ」である。言葉を知らない連中が、これを「ニセコ」と呼んで、己れの無知を顧みない。「ニセイカウシュベ」とか「ニセイケシュオマップ」の名を見たら、類似の名もあるもの

だ位な感じを持って、比較してみる気が起らないものだろうか。学問は無くとも、研究心は有ってほしい。その基礎觀念が無い輩は、とかく遭難を起すことになる。

サッポロから定山溪に行く途中にも「ニセイオマップ」という所がある。それを訛って「ミソマップ」と称し、それに「薩摩」の漢字を配した。それを一桁上手の連中が「ミスマイ」と呼んで怪まない。

大切な地名を滅茶苦茶にするのは、地図関係の一部の人達に限らない。鉄道の駅名など、とかく由緒ある地名を、何の会釈もなく変貌させてしまふところを以て見ると、自分の国の歴史などを、どうなってもかまわぬという心掛けなのであろうが、吾々の仲間、そういう連中は侵入させ度くないものである。

デマベンドの

標高

山崎安治

イランの名山デマベンドの標高について編集者から問いあわせをうけ、今年の山日記の中の吉沢一郎氏編世界の山の項をみると五七七一メートル(一八九三四フィート)一八六〇年ドイツのミニエトオリ隊登頂とあった。ところが一九五一年版の山日記望月達夫氏編の世界の高山百二十種の中には標高五六六九メートルとなり、いづれが本当なのかと、手もとの

Standard Encyclopedia of the Worlds Mountains (Anthony Huxley 編) をみると一八六〇〇フィート、初登頂一八三七年W・T・トムソンとある。一八六〇〇フィートはメートルに換算すると五六六九メートルになる。

ハックスレイ編のこの膨大な世界山岳事典(図書紹介欄参照)はアメリカの山のことはとくにくわしいようだが、ヒマラヤなどは

かなりお粗末で、中でも日本の山となると日本アルプスと富士の説明があるが、まったくでたらめが書いてあるので、どの程度デマベンドのことも信用してよいかわからない。結局今年の山日記の吉沢説を信用しておくのが無難と思うが、ハックスレイ編の本にはデマベンドについて次のような説明があり、ちょっと長くなるが参考までに大要を訳してみた。

Dema vend 頂上のせまびまつている休火山、位置、イラン・エルブルス山群、高度一八六〇〇フィート、地図9IH1、初登頂一八三七年W・H・トムソン。

イランの旅行者はきまつて凄じい切り立った絶壁や、ギザギザのピークや広漠とした砂漠を見なれているのでデマベンドの眺めは眼の保養になる。エルブルスの山々や山稜によってぐるりと取り囲まれていたが、数マイル彼方から望まれ、ずばぬけた標高と特異な輪かくが目まを引く。日本の有名な富士山のように北部イランの名峰となつてゐる。(首都テヘランから僅か東北四十五マイルの地点にある)多くの旅行者たちは口をそろえてその白雪の円錐体はイラン随一の眺めで、得難い宝物だといっている。デマベンドという小さな絵のような町がこの山の南斜★

☆☆☆☆

アメリカ・エヴェレスト登山隊との交歓

☆☆☆☆

ノーマン・ディーレンファース隊長以下九名のエヴェレスト登山隊は、先発、本隊の二隊に分れて、東京を経由してカトマンズへ向った。

先発隊は隊長夫妻、ナシヨナル・デオグラフィカル・ソサエテのカメラマン、バリー・ビショップ夫妻、映画カメラマン、ダニエル・ドーディ氏の一行五名、日本でカメラその他の機械を購入するために一月十五日羽田着、十八日迄滞在した。この間本会より横名誉会員、松方会長が、十七日宿舎の帝国ホテルを訪ねて懇談、同隊を激励した。

その後本隊十五名（登攀隊長アンソエルド氏は途中先発）は、隊長代理であり、學術班のリーダーであるカリフォルニア大学の物理学研究室のウィリアム・シリ博士に率いられて、二月五日来日、七日夕刻カルカッタに向ったが、六日午後、横名誉会員、田中毎日新聞社ヒマラヤ登山事務局長、松田の三名が、宿舎である帝国ホテルを訪ねシリ博士、アルマンウィットカー三氏と懇談した。席上、中共隊によるエヴェレスト登山の

話がでるに及び、シリ博士より、ぜひ中共隊のエヴェレスト記録映画をみたいとの要望があり、横、折井両氏のアレンジにより、翌七日正午、東京シネ・センターの試写室にて同映画を観賞した。引続いて一行は本会主催の糖業会館に於ける昼食会に臨み、種々とヒマラヤの話題に楽しい一時を過ぎた。本会からは、横有恒、成瀬岩雄、深田久弥、吉沢一郎、田中源治、松田雄一の六名が出席した。その後、辰沼、松田は、同日午後再び宿舎に、酸素担当のT・F・ホーバイン博士を訪ね、出発直前の忙しい中ではあったが、酸素問題、高度馴化問題につき、ディスカッションを行った。（松田）

エヴェレスト成功に祝電

ディレンファース隊長に率いられたアメリカ・エヴェレスト登山隊は五月一日午後一時エヴェレストの登頂に成功したが、本会では直ちに横、松方会長の名でディレンファース隊長あて祝電をおくった。（松田）

労 慰 氏 雄 津 美 市 古
告 報 会 餐 晩

長らく毎日新聞社ヒマラヤ登山事務局長としてマナスル、ヒマルチュリはじめ数多くの登山隊の世話をし、てこられた古市美津雄氏には、此の

度御都合により、同事務局を去られ、日本食糧品工業開発研究所に榮転されることになった。そこで去る二月八日（金）午後六時三十分より麻布、国際文化会館に於いて、関係者有志一同相集い、晩餐の会を開催したが五十五名という多数の出席者をえて、マナスル、ヒマルチュリの想い出に花が咲き海に楽しい一夕であった。

席上横氏より古市氏に対し記念品（当日の出席者の他に二十一名の賛同者を得た）が贈呈された。尚同事務局は毎日新聞社新館六階に移転し、後任者として田中源治氏が就任され、従来通りの事務を引継がれることになった。

（出席者）……（順不同、敬称略）

・近藤茂吉、横 有恒、松方三郎、日高信六郎、三田幸夫、伊集院虎一、早川種三、佐藤久一朗、成瀬岩雄、村井米子、吉沢一郎、深田久弥、谷口現吉、折井健一、加藤泰安、村山雅美、小原勝郎、千谷壮之助、村木潤次郎、大塚博美、芳野起夫、日下田実、山田二郎、松田雄一、高橋 進、田辺 寿、竹田寛次、山野井武夫、宮下秀樹、原田雅弘、村田茂、丹部節雄、篠田重治、梶原信男、山本信樹、小川鼎三、中尾正武、前田精三、小方金弘、細川沙多子、渡瀬亮輔、対馬好武、竹節木村、田中源治、浅岡光正、依田孝喜、木村勝久、広羽 清、徳岡孝夫、宝田為男、横尾昌造、細野博吉、堀明子、森恵津子、三神順子（以上五十五名）

（松田雄一）

★面に美しく位置しており、テヘランの人々が夏の避暑地として愛用している。

有史以来噴火の記録はなく、現在この山は実際には死火山とみられてはいるが、すそ野に温泉が数カ所ある。頂上の火口は直径約二百ヤードで黄色い硫黄分を含む岩と軽石が沢山ある。冬と春は火口と山の上部が雪に覆われ、尾根筋のくぼみには年中雪が残っている。テヘランから年中頂上が見えるが空気の澄んだ日には、はるか南の塩の大砂漠のあるカシヤンカからも望まれる。

このような特異な山がイランの伝説の象徴となるのは当然である。十世紀の偉大なベルシヤの詩人フィイルダランは彼の叙事詩シャー・マナの中で、暴君ゾハクが若者エリダンによって如何にして倒されとりこになって、デマベンド山麓の岩くつて死んだかを物語っている。その地方の伝説はゾハクのうめき声がいつでも聞えるといっている。この山麓にはジェムシドやレスタムといった英雄がいた。いま一つの伝説によるとノアの箱舟はアララット山頂ではなくデマベンドの山頂にあるのだという。デマベンドはW・T・トムソンの初登頂以後しゅう登られている。昔からベルシヤ人は山を征服

するということには反対している。登山は長いが困難も危険もない。ガラ場や小さな岩尾根を越えて登る。夏のはじめに登ると、山の上部では頂上の火口まで広い雪面を横切ってゆかねばならない。きわめて高い独立峰なので山頂からの展望は素晴らしく、広大な山や谷や砂漠のパノラマが数百マイルにわたって四方に展開する。エルブール山脈の他の峰々もすべて見渡され、北方にはむしろ暑いカスピアン平原、南方には中央イランの砂漠のひろがりが見望のうちにある。

一九六三年「通常会員総会」

▽日時 4月20日（土）午後二時
▽場所 お茶の水、体協会議室
▽なお、同日午後一時より東京支部総会を開きます。

本 会 目 次

- ・学生登山に對する方策……………一
- ・地名と当て字……………二
- ・デマベンドの標高……………三
- ・アメリカ・エヴェレスト登山隊との交歓……………四
- ・古市美津雄氏慰勞晩餐会……………五
- ・再び世界の最高峰について……………六
- ・統一、黎明期の二高山岳会……………七
- ・思い出の写真帖から……………八
- ・第二十三回小集の記……………八
- ・図書紹介……………八
- ・会務報告……………三
- ・会員通信……………三
- ・東海支部「猪」を食う会……………四
- ・東京支部報告……………五
- ・水の山登山技術講習会……………五
- ・静岡県支部、燭園あいさつ……………五

再び世界の最高峯について

吉沢 一郎

まだ、或いは、また、アムネ・マチン（積石山の最高峰）は一九六〇年に、白進孝を隊長とする中共隊が登って、七、一六〇mと決められてしまった。

ところが一九四一年頃のNGMに出ていた記事をAAJ（一九四二年）が又紹介しているところによると次のようなことになるのである。

即ちエクワドル・アンデスにあるコトパヒーの方が、NGMによると、エベレストより高いのである。（実はチンボラソの方がまだ少し高い、AAJ）その理由は、地球は完全な球体ではなく、極の方へ向って稍々平らになり、赤道に向かってふくらんでいるので、コトパヒーの頂上にはエベレストよりも余計空間に出っばっている、ということなのである。

完全に「設計された」世界でならば、地理学上の北極、磁気北極並びに寒気の北極の三極の全部は勿論最も正しいところ、つまり世界の頂上におかれた筈である。そうすれば世界の最高峰は文字通り世界の最高峰となり、それについてのバカげた論争も起らない。

然るにである。われわれの寒気の北極は不幸(?)にして、地理学的な北極の近くには全然なく、シベリアの下真中のとんで

もないところにある。それから磁気の北極は最も暗いカナダの外縁という、もっとおかしいところを、驚くほど気紛れな動き方でうろついている。そして最後に最も不思議なことは、最高峰が結局最高峰でないという珍現象が現われてきたのである。

この変テコな世界においては、最高峰を決めるには二つの方法があるように思える。一つの方法はいうまでもなく、ある山のある特定の緯度と同じところにある平均海面から測るもので、他の山はその山の特定の緯度の海面から測り、高低はそこで比較される。この方法によって北緯二八度において海拔八四〇mと測られたエベレストは、ヤスヤスとそれまでに測量された山の最高のものという栄冠をかち取ったわけである。

最高峰を決める他の方法は、地球の中心から最も遠く空間に突き出たものをとるというものである。この方法を使うとわれわれはまず、地球が実際は扁球体で、完全球体からの扁率は二九七分の一となっていること、従って地球の中心から極への半径(6357 km)は、赤道への半径(6378 km)より約21 km 短かい、つまり極は地球の中心からみると低く且近いということになるのである。

さて地球が可なり対称的で固定扁球体と

カット・記念絵葉書の袋、バッジの図案は駒草を描いたもの

大正四年五月 於仙臺

二高山岳會第一回大會記念



二高山岳會

続・黎明期の
二高山岳會

横田 敬一

会報二三号に二高山岳會創立時代のことを御紹介したが、その後当時の「山岳」を調べたところ会報・雑報等に詳細な報告がなされていることを知った。また、先輩の方からも種々御注意をいただいたので再びここにまとめてみたい。

大正の初期、各学校の山岳部があいついで創設された。大正二年六月一高山岳會が名を上げるや、これを追うようにして同年十月三高山岳會が発会式を兼ね講演幻燈会を催し、日本山岳會はこれに対し幹事小島久太、辻村伊助、高野鷹蔵の三氏を派遣した。二高山岳會の成立もこれらの動きに刺激されたものであるが、大正三年六月発足した。

山岳第十年第一号（大正四年）に、二高山岳會幹事から二高山岳會趣旨が寄せられており、それによると、山岳會の目的は山岳に関する一切の研究と、山岳並びに旅行の趣味の普及にあった。会員は通常会員

（生徒及び先輩の大学生）と名誉会員（諸先生）の二種で、通常会員の会費は毎学期二十銭。大正四年二月現在の通常会員数は八十四名であった。同年二月十八日決定の幹事は庄井慎平・中上川小六郎（庶務）、宇野実・田幸彦太郎（会計）、小倉謙・石川欣一（記録、書記）の六氏。

第一回山岳旅行は大正三年七月一四日栗駒岳（嵐のため中止）・吹上間けつ泉方面で十一名参加、第二回旅行は同年九月二十六・七日泉岳で十二名参加であったことが報告されている。

第一回旅行は前回会報二三号に記したものと合致しているが、第二回の泉岳は日時・人数とも相違している。ほかの記録にも泉岳は十月と書いてあるので、この山岳誌上の報告は誤りではないだろうか。

山岳第九年第三号（大正三年）の新入会員欄に石川欣一（紹介者伴野清・百瀬慎太郎）中上川小六郎（紹介者石川欣一・高野鷹蔵）の名が見えているから、二高山岳☆

仮定すれば、エベレストの緯度における海面は、赤道上的コトパヒーの緯度における海面よりも $21 \text{ km} \times \frac{38}{90} = 6705 \text{ m}$ 低く、地球の中心にそれだけ近いということになる。

かくてコトパヒー（その緯度の海面上 5944 m の高さ）は実際には、エベレストの山頂よりも地球の中心からは、 $(6705 + 5944) - 8840 = 3809 \text{ m}$ だけ遠く空間に突き出ている訳になる。

高度を測るのにこういう方法を用いた場合、コトパヒーより高い山がないだろうか。アフリカのルウェンゾリー、ケニア、キリマンジャロ、ペルーのワスカラン、コトパヒーの隣組のチンボラソ、これらは一寸考えると可能性がありそうに思える。だが私（吉沢）の大雑把な計算によると、ざっと左表のようになり、結局チンボラソ

山名	海抜 高度	緯度 (大略)	赤道半径 との差	中心より の距離
Chimborazo	6,264	2.5 S	-584	6,383,680
Cotopaxi	5,893	1.0 S	-237	6,383,659
Kilimanjaro	5,895	3.0 S	-702	6,383,193
Kenya	5,199	0.5 S	-117	6,383,082
Ruwenzori	5,119	0.5 N	-117	6,383,002
Huascaran	6,768	9.0 N	-2,100	6,382,668
Everest	8,840	28.0 N	-6,533	6,380,307
富士山	3,776	35.0 N	-8,167	6,373,609

が大昔にいわれていた通り、世界の最高峰に返り咲くのは面白いし、私にとってはこうい算術の方が、ゴルフよりは余程愉快でもある訳である。

最後にこれを紹介した、そして一九三二年に R・L・バードソルと一緒にミニア・ゴンカー (1987 m) に初登攀した、テリス・ムーアの結論を加えて、この極めて論理的なおハナシの結びとしよう。

登山の世界では、経済学や政治学の世界と同じように相衝突する理論を受入れるか否かは、結局、誰かの理論を血祭りにするほかはないということがおわかりになるう。

家にいて、じっと椅子に腰かけながら、この記事を読んで、自分が既に「世界の最高峰」に登ってしまっているんだということを見出し、いい気になっていた私に、実は今、地球の中心を計算のもとにするなんて、少し気持ちがいいみずぎていんじゃないか、と知らせたよこした友人もいた、という次第なのである。

いかがですか。臍曲りの皆さん!! 富士山が世界の最高峰になる、というような学理的な卓説は出ないものでしょうか。

「自然愛護の集い」御案内

○日時 昭和38年6月12日(水)五、三〇

〇場所 虎ノ門 久保講堂

〇講演 松方三郎氏

〇映画 尾瀬、富士に生きる

〇主催 日本山岳会東京支部

〇会場整理券 一〇〇円

☆会が成立してまもなく日本山岳会に入会したものらしい。(同じ新入会員の中に横有恒氏の名も見えている)

大正三年度末の日本山岳会幹事の改選では二高の先輩である木暮理太郎氏が新任されているが、二高山岳会の記事に木暮氏の名が見えていないので、このころはまだ木暮氏と交渉はなかったようだ。

「若い者の癖かも知れない。無茶苦茶に大



富士の裾野

記念絵葉書から
茨木 潜之吉

きな計画を立てて、そうして無茶苦茶にやっってしまった、という書き出しで、大正四年五月八・九日の二高山岳会大会記事が同じく山岳第十年に報告されている。「鶴二」という筆名を使っているのだから書いたかわからないが、若人のはずんだ心が目に見えるようである。

大会は展覧会と講演会とからなり、陳列場はいつもは教授会の開かれる二階の会議室であてられた。机の上には高野鷹蔵氏出

品の雪靴カンジキ、吉沢庄作氏の四つ切、茨木画伯の水彩画と油絵、近藤茂吉氏の白い帽子、雪眼鏡、マニラロープ、ウェストン氏の写真と「ジャパニーズアルプス」、二高山岳会会員が作った蔵王の模型、ユングラウ三山の小さな模型(これを見てよだれをたらしと記してあるので、日本山岳会からの出品であろう)等々並べられた。

二高のドイツ人の教師は山岳図書の前で二時間ばかり妻君令嬢と足を止め、またドイツ語主任教授は今度ヘディンカナンセンの本を買ってやろうと生徒に約束された。

壁には日本の山やアルプスやスコットランドの絵葉書、植物標本、ウインタースポーツに関する器具等が飾られた。外には日本山岳会の円錐形天幕と二高山岳会会員の携帯天幕が張られ、携帯天幕の中に高野氏の寝袋を入れたところ、もぐり込むいたずら者もいた。

八日(土曜)は来観者が少なかったが、九日(日曜)は天気もよく大変な人だった。第二師団でもこの大会に非常な期待を持っていたが、支那のほうに急にやしくなり来られなくなった。(大正四年五月袁政府との間で日支新条約が締結された)

講演会は八日夜六時半から講堂で開かれた。ちよど仙台座のお祝儀様誕生日の祝とぶつかったが、それでも約十分の一の女性を混えて五百名内外集まった。武藤校長の挨拶後、東北大岩崎講師がバラウ島ガダラル大石灰洞の探検談を幻灯つきで行なった。(日本の南洋諸島占領は前年の大正三

年)、幻灯器械のエビデハスコープの操作は本多光太郎博士の好意により高柳助手があつた。

ついで高野鷹蔵氏が演壇に立たれ、日本アルプスの名の起源、地理上の説明、登山の目的、欧州アルプスとの相違、日本の山の特徴、高山植物等について幻灯を使用し、講演された。

最後は辻村伊助氏の幻灯と講演であつたが、そのクライマックスは辻村、近藤両氏が前年八月スイスのグロス・シュレックホーンで雪崩に遭い滑落した話であつた。

「講演者もさすがに思出に堪えなかつたと見えて、声はひくく、そうしていくらかセンチメンタルになつて」いつた。辻村氏は雪崩に巻き込まれたとき針ノ木峠の残雪で足を滑べらしたことを思い出したと話した。(このことは辻村氏のスイス日記のアヴァランシュの項にも出てくる)

辻村氏はスイスのガイドの大切なことをしきりに語つたので、「キャレルなのケロック(ガイドの名だろうか?)」なのはやっぱり昔の夢になつてしまつたのかしら、どこでも同じくだんだん人間は悪くなつて行く「と見える」とこの報告者は感じた。

辻村氏の講演はユングフラウのアルパイングローで終つた。同年五月二十三日日本山岳会第八回大会が行なわれたときの記事によると、辻村氏は自写の写真によって彩色して作つた幻灯映画百枚を使用したというから、この二高山岳大会のときもほぼ同様であつたらう。

この大会の報告は詳細であるにもかかわ

らずここに掲載した記念絵葉書についてはふれていない。この絵葉書は植村癸巳男氏所蔵のもので、最初の枚数はわからないが、大正三年十一月及び四年六月に関西で日本山岳会が開かれたとき発行された記念絵葉書の枚数が、それぞれ二枚及び三枚であつたところから見ても、多くても三枚であつたと思われる。なお会報二二三号に小倉氏もこの絵葉書を所持しておられるように記したのは私の思い違いで、訂正する。

第一回山岳旅行に参加された神田茂氏からこの旅行に植村氏、石川氏、金谷要作氏に参加されたというお知らせがあり、また神田氏が山岳会の旅行に参加したのはこれ一回だけの由である。会報二二三号に二高山岳会会員と記した藤井潔氏は大正五年年度の尚志会(生徒会)会計委員として活躍されたが山岳会のほうはほとんど関係しなかつたということである。広い意味の会員であつたのだらう。(三月十日記)

☆思い出の写真帖から

神津得一郎

(会員番号五六)

大正十一年七月、当時第二高等学校(旧制・仙台)の三年生だった私は学友と四人で大町から針木越え立山・剣の旅をした。小黒部を経て祖母谷からさらに唐松岳を越え八方尾根を下つて安曇野にもどるまで全行程九泊十日の旅で、その毎日を天幕に★



第二二三回 小集会の記

白骨温泉

小野利次

今年の現地小集会は信濃支部のお骨折りで、三月二・三日の両日、乗鞍山麓白骨温泉で開催されることになった。

二日早晩、ひんやりとした夜気に包まれた松本駅に降りた私と松橋君は清澄な空気を深々と吸い込んだ。

スモッグによんだ東京の巷から脱け出で、こゝまで来ると何か安堵に似た心の安らぎを感じる。

始発の島々行き電車は空いていた。

味爽の安曇野を走り行く車窓一杯に、大滝、蝶、常念の白銀の城塞が庄する様に浮び上つて来た。

「これだから、山はやめられないね」と折井さんが如何にも嬉しそうに私をえりみて語つた。

島々の待合室の赤々と燃えるストーブに当っていると、諸岡さんが入つて来られた。山間に鹿の子斑に残る雪の中をバスは一路、沢渡まで進む。

一〇分の小憩の後、更にチェンの音を山峡に響かせて白骨口まで入る。

砂漠なみの異常乾燥の続いている東京にひき変えてここ乗鞍山麓は、春とは云え、深々とした雪が朝日に目も眩しく輝いていた。

遅くなった朝食を小屋で摂っていると、表の戸が勢良く開けられ、西穂小屋の村上さんが、栗田君を伴つて入つて来る。

久瀨の辞を述べ、また一しきり山の話に花が咲いた。

「皆さんスキーを履いて行きましょうよ。」

村井さんの声に私達はシルを貼り付けるスキーの裏から伝つて来る雪の感触が快よく、ストックを突くたびに、「きゅう、きゅつ」という音が静まり返つた四囲の空気を震して鳴った。

私達はいつの間にか、口数も少くなり、ツアー独特の楽しい雰囲気の中に吸い寄せられて行くのを感じた。

左手の岩壁に懸つている滝は完全に凍結して、つららと氷塔が妖しいまでに青味を帯びた光を放っている。

七曲りの道を右へ左へと折つたみながら發行を続けて行くと、誰かが「うわ、素晴らしいなあ」と声を上げる。

ふり返ると霞沢岳の頂稜がスカイラインを限つて一際高く聳えていた。

最後の登りを終ると、針葉樹林の中にひっそりと連つている新宅旅館の前に出た。

此処が今宵の宿であり、岳友と交りを暖める憩いの場所である。

★すごした。

案内者は対山館百瀬氏推奨の黒岩某で、背の低い地味な男だった。ほかに荷持の人夫が三人、そのうちの一人は、一行の草鞋もちである。



宇治長次郎（左）と佐伯平蔵（右） 立山雄山頂上 大正11年（1922）7月14日～24日 神津得一郎

が揃うことは珍らしい、君たち写真をとらせてもらいなさい」とすすめられ、剣登山を目前にして、私は感激してシャッターを切ったことを思い出す。そのときの写真がこれ（上掲）である。

兩人とも素足にはばきをかけ、藁口を持っていたが、長次郎はやさしさの中にフアイトがあり、平蔵はガムシヤラで一本気な性質が写真にもよく出ている。

カメラは当時の小西六のリリーと称する手札判フィルムはイーストマンのバック。フィルタはオレンジの6倍くらいのものを買わされたので、露出不足で失敗した。

当時の仲間のうち坂牧龍三郎君はいま神戸市で眼科医院を開業され、中野敏三君は浅間温泉の目ノ湯主人としてともに健在であるが、山本久一郎君のみ故人となった。

途中、室堂で米の補給をしたが、たまたま雄山頂上で、どこかの新聞社が官庁の団体の案内をしてきた平蔵と長次郎に出会った。一行は何となくえらそうな人たちだったが、その一人から「平蔵・長次郎の二人

このときの山旅は後年永く忘れ得ぬ旅となったが、とりわけ初心の人夫が、三田平の夕映の美しさに見とれてしまい、夕餉の仕度をも忘れてじっと佇んで眺めていた後姿が今でも目に浮ぶ。

（文責編者）

玄関の右手に在るサロンは新しく改築されていたが、天井は昔の古い梁を活用しているのが嬉しい。

聞くところによると、この家は白骨温泉の中で一番古く、約百三十年も続いているとのこと。二階に上る階段はしは真中が擦り減っていた。

最近、著しく変貌して行く温泉郷の中に在って、只管、昔日の素朴さを今にとめているこの家の御主人に敬意と感謝の念を覚えた。

白骨温泉の泡の湯と呼ぶ旅館の上手が白骨スキー場であり、最近リフトが一基架設された。

白樺の明るい林が片側に続き乗鞍岳の頂を遙かに仰ぎながら滑る気分は仲々良い。時折り強風が、白樺林の中に雪煙を舞い上げて通り過ぎて行く。

日が傾くと急に寒さが加って来た。私達は谷合いの温泉めがけて凍て付いた山道を滑り降って行った。

七時近くに懇親会が開かれた。信濃支部長の高山さんが御病氣のため、ご出席出来なかったのが残念であった。

鍋に煮える桜肉の前に長講挨拶は何とやら、「座談会は後程、下のサロンで行いましょうから、目の前のものをどどん召上って下さい」との小里さんのあいさつに吾々は食べかつ飲んだ。

「田ざり」とか蜂の子とか、酔の廻り初めた私には覚えきれない御馳走が後から後から運ばれて来た。

「うわあ」という地元の方々の歓声は、名物の手打そばである。

下のサロンでは自己紹介と座談会が初まり十一時を過ぎるまで楽しく続けられた。翌日は朝から雪が降りしきっていた。

スキーに出掛けて行く人もあり、炬燵でしみじみ雪の温泉情緒を味わう人もいる。

私は地階の浴槽の湯煙の中で信濃の山旅の追憶に耽けていた。

信濃と聞いただけで私は故郷のような愛着を覚える。

三十年前、父に連れられて碓氷峠を歩いたことがあった。

気が遠くなりそうな空の青さに映えた紅葉の美しさと、白壁の山家のたゞずまいに何とも云えない魅力を感じた私は、子供心にも知らず知らずのうちに、郷土愛に似た感慨を抱く様になって行ったのである。

以来、信濃の山に登ることが私の年中行事の一つとなった。

戦局が苛烈となった昭和十八年の晩秋、入隊を前にして槍・穂高の峰に別れを惜しんだのも、蝶岳の頂きからで、そして復員の荷物を玄関に放り込む様にして登ったのも乗鞍岳であった。以来十幾星霜！

今またこの白骨温泉の現地小集会に参加させて頂けた幸福感をしみじみと味わう私をみつめることが出来た。

マ参加者氏名（順不同）

村井米子、清水悟朗、牧野衛、百瀬孝、野口末延、小里頼忠、諸岡一次、村上等、小野利次、三代沢本寿、松橋秀次、小岩井治、折井健一、浅輪幸久、富田美知子、若浦義弘、池田光二、高尾徳繁、早乙女緩次、田中弘美 以上二十名。



深木猪之吉

図書紹介

いることである。たとえば富士山については北斎の紅富士の版画を掲げ、小泉八雲の文章や東京大会に出席したペンクラブ会員が紅富士を機上から眺めた描写などを引用すると、阿蘇

Standard Encyclopedia of the World's Mountains

山は世界最大の火口底を有する山としてとりあげるといった具合である。

この本はヒマラヤの大山から、ハイチのような小国にある山に至るまで、広範囲にわたって個々の山岳と山麓を三百以上の項目にわけて解説し、これに千五百の山名録をつけたものが主体となっている。もちろんこれ位では世界中の山の数からいって、収録されるパーセンテージは知れたもので、たとえば日本についていえば、富士山、日本アルプスが解説され、穂高、御岳、白根、阿蘇山が山名録に載っている程度である。

ただこの本の特色は、地球上の無数の山々の中から、かなり変化に富んだ選び方がしてあることで、その解説も画一的でなく、その山の性格によって異った行方をして

盛明氏が Moriaki Oke, エヴェレスト登山隊員の Charles Evans 氏が Thomas Evans であつたりするような誤植がいくつかに目につく。また穂高が北岳よりも高く、ヒマラヤの山岳についても、その標高を「山日記」のそれと比べてみると、次のように違っている。どうしてこうした相違が生じたのか、その理由は不勉強な私にはわからないが、参考までにその一部分を掲げてみる。(数字はフィート)

(本書)	(山日記)
Annapura I	26,492 26,504
Cho Oyu	26,967 26,750
Dhaulagiri	26,795 26,976
Everest	29,002 29,028
(又29,145)	
Kanchenjunga	28,146 28,270
Nanga Parbat	26,629 26,658

要するにこの本の記述は完璧とはいえない、むしろ思われるから、その含みで利用すれば、なかなか便利で楽しい本である。こういった本はわが国には類書もないのだから、あまり専門的なことを要求しない限り、私などにはありがた

Alpine Journal Vol. 67, November 1962, No. 305

アルパイン・ジャーナル第三〇五号の主な目次は次のとおりだが、その内容はまことに奥行の広さを感じさせる。会員の足跡は世界のすみずみにまでおよび、パイオニヤー・ワークを活発につづけていることが知られる。

- ☆追憶(H・E・Lポーター)
- ☆南極大陸のクライミング(マルコム・バーレイ) ☆モン・ブラン初登頂に関する新史実(サー・ギヤビン・デ・ビア) ☆エギュー・ボインセノ(D・ウィーランス)
- ☆ハンニバルの峠に関する実験報告(A・リチャード・フォリー)
- ☆パタゴニア・アイス・キャップの跡(エリック・シプトン) ☆ダーウイン山脈(エリック・シプトン) ☆クロツゾン・デ・ブレント(I・オギルビー) ☆ジョセフ・クヌーベル伝(A・ズールヒヤー)
- ☆ザ・シエラ・ネバダ・デ・メデイダ(サー・ダグラス・バス)
- ☆一九二一年エヴェレスト遠征日誌第二部(G・H・バロック) ☆エヴェレストにおける中共隊の写真(ヒュー・メリック) ☆豪州中部砂漠地帯の山々(M・ホスフォード) ☆ダービー州ヒマラヤ登山



カット・佐藤久一朗

三月理事・評議員会

七日・ルーム

△出席者松方会長、渡辺副会長、理事山崎、辰沼、川上、木下、村木、皆川、高橋、古沢、評議員日高、藤島、深田、織内、石原、東京支部長、後藤山形支部長、牧野静岡支部長、芳野東京支部委員、田中関西支部委員、

△委任出席折井、田辺、入沢、望月、伊藤(欠)、青木、水野、

マ議事と報告

①新年度役員について (渡辺)

・新年度役員として新たに小原、深田、松田、武藤、梶本の五氏を理事に津田、加藤泰、川喜田(欠)、吉沢の四氏を評議員に推したい。

②昭和三十八年度会員総会について (松方)

・期日、四月二十日(土)、場所、体協会議室を予定。

③愛知大薬師岳遭難捜索について (渡辺)

・捜索本部の組織化、捜索対策の確立について、須賀東海支部長あてにアドバイスする。

④山岳協会について (渡辺)

隊一九六一年、第一部(R・G・ペティグリー) ☆装備と技術に関するノート、ビバーク用装備(C・F・S・ボニントン) ほか。

インディオの秘境

藤木高嶺著

巻頭のポーター氏による論文は半世紀にわたる氏の登山についての回顧だが、マロリーやヤングなどとの楽しい山行を追憶するとともに、登山界の将来にふれ、若いジュネレーションに対してアーティフィシアル・クライムの行きすぎをいましていて、熟読すべき内容である。新しく発見されたモンブラン初登頂に関する記録の写しについてのビー氏の論文、実際に印度象を歩かせてハンニバルのアルプス越えに関する実地検証の報告も面白い。ダービー州のヒマラヤ隊はインドのクル地方のデイトバ、インドラサンなどの登山報告、そのほかシブトン氏の南米大陸南端の山々の紀行や、ウィーランス氏の同じく同地方フィッツ・ロイの近くにあるポインセノの登攀記、あるいは南極大陸の山の話、豪州の砂漠の中にうずくまっている奇怪な丸い岩峰の紀行など、世界の山というものがどれほどまだ未知なるものを蔵しているかがあますところなくこの号で示されている。追憶欄にはノイスとラトレッジの記事が目を引きいた。

(Y・Y)

らみたことかと白伏したりしているのはどうかと思われる。

個人的な紀行であっても、この種の書物は後世に残るものなので造本にもう少し気を配られたらと思う。行動概要、地図も付してほしかった。

(山崎安治)

昭和三十七年十二月一日朋文堂発行、B六版、二四五ページ、三三〇円。

▼山日記口絵用写真

懸賞募集

御自慢の山の写真を懸賞募集します。ふらって応募して下さい。

○四季を問いませんが未発表のものに限りです。一人で何点応募しても結構です。

○カラー写真に限りません。ポジフィルムを送って下さい。ネガフィルムの場合は名刺判の印画を添えて下さい。

○応募作品は返却いたします。

○送り先 東京都千代田区神田駿河台一ノ茗溪堂内

日本山岳会山日記編集室

○締切 七月二十日

一等 一名 五〇〇〇円

(六四年版山日記に掲載)

二等 一名 二〇〇〇円

三等 一名 一〇〇〇円

山日記一冊

山日記編集室

日本登山学校の開校に際して一趣意書、計画書等を送呈します。

(東京都大田区調布嶺町一ノ一四〇、川崎隆章あて)

37年度第7回図書委員会

十一月二十二日・ルーム

・出席者 深田、小林、徳久、大橋

・議事と報告

①「一本展」の打合わせ

②「山岳関係図書百選」について

37年度第8回図書委員会

十二月十三日・ルーム

・出席者 徳久、大橋、小沢、古川

・議事と報告

①「山岳関係図書百選」の件

②和書受入れ報告

③海外登山資料収集経過報告

37年度第9回図書委員会

出席者 小林、徳久、大橋、小沢、古川

・議事と報告

①海外登山資料の件

②洋書図書目録

・原稿を最終的にあたる。

③主要図書百選の件

・選定基準について話し合い、次回までに小林氏の資料の中より各自百冊分抜き出す。

37年度第10回図書委員会

二月十四日・ルーム

・出席者 深田、大橋、鈴木、古川

・議事と報告

①主要図書百選 欠席者多数のため次回に延期

②「一本展」原稿について

・なるべく一冊にまとめて、会報に準ずる形式でまとめた。

③洋書図書目録の件

・最終稿を小林氏より深田氏に渡し印刷に付す。

④海外登山資料

・調査カードを再発送する。

⑤和書・洋書受入れ報告

(担当・大橋晋)

⑤学生部について (山崎)

・目下文部省で全国の大学に実態調査のアンケートを行っている。それがまとまった上で新方針をうち出したい。

⑥ヒマラヤ委員会報告 (村木・辰沼)

・近日中に具体案をまとめられる段階にあり、メンバーその他についてはオーブンにやりたい。

⑦第二三回小集會(現地)報告 (牧野)

・会場白骨温泉、参加者二十名、天候は恵かったが盛会であった。

⑧東海支部いのししを喰う会報告 (渡辺)

⑨第二二四回小集會について

・秋田支部主催現地小集會、期日四月六・七日、場所秋田駒ヶ岳(駒草荘)を本部の小集會として行うことに承認決定。

⑩団体保険加入について (松方)

・山崎理事が検討する。

⑪オニヅカのアλπ・ノートに山日記の記事引用について (渡辺)

・重ねて照会をする。

緊急理事・評議員会

三月二十二日・ルーム

▽出席者 松方会長、三田副会長、渡辺副会長、理事 山崎、川上、中島、村木、皆川、高橋、田辺、竹田、古沢、監事 野口、松本、評議



吉 猪 木 茂

会員通信

ン・バンジャ
ン越えは私共
は中止し、宮
木君とラクバ
のみ試みまし
たが、トンジ
エでポーター
が得られずだ
めでした。し
かしこの地域
は又私も行き
たく思い次の
機会にしま
す。

ネパール便り

神 原 達

考えてみますと、現在の私共の立場は日本のヒマラヤニストにとつての理想はなく、私もこの数年間のネパールでの研究生活をできるだけ有意義に送り度いと考えています。

一、ラムジュン王国調査行

昨年十一月〜十二月に、私共二人と京大山岳部の学生宮木君（インドラサン登頂後カトマンズに来ました）及びネパールのハルカ・バハドウル・グルン君とでシエルパのラクバ・ツェリンを連れてポカラからマルジャンディ沿いにヒマルチュリ山の麓を旅しました。これは前便にてお伝えしましたが、この地域はラムジュン王国のあった地域で、歴史調査、社会経済調査、地理調査で大変有益な旅でした。又、このルートは私が、六〇年に一人で旅し、今回で二回目のルートでもあり、その土地と人々とのことがよく分りました。ナム

マナスル三山はやはり日本が登るべきとつくづく思いました。P

・29、又パウダー、そしてフンギ峰と、登るべき山はこの地域に沢山残っています。今年日本の各隊が西ネパールに入れば、ネパール国内のほとんどの地域を日本人が歩いたこととなりますから、それ以後は再びマナスル山塊に戻り、そして以前見せて頂いたマナスル地域の十万分の一の地図の空白を埋めて、ドイツのエウエレストの地図の様な立派な地図を世界の登山界に発表するのがよいのではないかと思います。私としてお手伝い出来ることは、山麓の村落、河川等の名前（ネパール名とグルン語名、又チベット語名の両者があります）。又ルート（交易路）に関してですが、例えばムシ・コ

ーラ（Musi Khola）といはるの完全一九二四年二十年の測量の際のミスで、住民はムシ・コーラなどとは一言も云わず、どこかの村でも、ンガディ・コーラ（Nga Di Khola）と云っています。ポカラのインド測量局の事務所に、H・

B・グルン君と共に旅した時も現在作っているインチャーマイのネパール完成予定、既にかなり広く出来ています。航空写真を基にしています。では、ムシ・コーラはンガディ・コーラに訂正する予定です。また Bhara Pokhari Lehi も大きな池の尾根ではなく、この尾根（Danda）という土地に古くから伝わる行政区分になっています。一山一尾根ごとに分れているのです。Bhara Thar に部族地方と呼ばれたことから出ているのです。これらはすべてH・B・グルン君を通じての情報ですが、彼と共に協力し、ラムジュン地方及びグルカ地方（この二地方でマナスル三山は北はラルキ・ラまで入りま）の地誌は是非数年のうちにまとめます。

宮木君と共にンガディ・コーラの奥のナイチュ村にて Argun、というグルン族の魂を昇天させる大変珍らしい儀式を見ました。おそらく外国人でこの儀式を見たのは私共が初めて最後でしょう。部族会議でその廃止が決まりました。

二、チョータラ行

十二月二十二日〜二十八日にカトマンズの東のチョウタラ県（ジュガールの山麓）をチベット問題研究員の古森君と共に旅しました。（妻も一緒）

クリスマスの夜、チョータラでジュガールの山々を眺めつつ送りました。この地方を通り中共の自動車道路が出来ます。ニエラム・ゾンまで抜けるヒマラヤで最も交

通便利な道です。

三、カルナリ捜索行

一月三十日〜二月六日、カルナリの事故で西ネパールに行ってきた。日本工営の測量現場 Chisapani、カトマンズ〜ポカラ〜パイラワ間を R.N.A.C. 機にて、パイラワ〜チカプールのドルニエ機でそして現場に一週間滞在し、その間西ネパール全域の上空を、同社の重役で地質部長をしていられる境田氏及び現場主任の中村氏と共に飛びました。カルナリ河に沿って初めてララ湖を見ました。

ドルニエ機は一月にカトマンズに来た時、正垣さんと私共が招待され、カトマンズ上空、カカニを越えゴザインクンドまで飛び、その折にランタン・リルン、又ゴザインタンを間近に眺めました。今回の飛行ではサイバルの南面、そしてシスネ・ヒマール、カンジロバ・ヒマール、ヒウンチュリを充分に見ました。サイバル南面は登山不可能のようでした。又、アピ・ナンパ山塊も随分小さい山が沢山あります。

ナラカンカールは国境山脈の中の一つのこぶで、はっきり指摘出来ませんでした。それよりも私にとっては途中の丘陵地帯が興味深く、西は未開と聞いていましたが、大きな尾根（ダンダ）と尾根の間には、それでもかなりの村があり、道がありました。今年中にはアジア学会の後輩と共にジエムラに入りたく計

員藤島（敏）、日高、深田、織内、石原（東京支部長）、牧野（静岡支部長）ヒマラヤ委員会加藤（泰）、梶本、谷口、

技術委員会片桐、山野井
委任出席金坂、木下、望月、小原
伊藤（秀）、今西（錦）、青木、篠田
藤井、池田、高山、後藤、荒巻、
永井、須賀、藤木

四月理事・評議員会

四日・ルーム

△出席者松方会長、渡辺副会長、理事折井、山崎、中島、村木、木下、徳久、古沢、監事松本、評議員日高、藤島、神谷、深田、交野織内、石原東京支部長、牧野静岡支部長、東京支部岩佐、鈴木、富田

マ議事と報告

① 通常会員総会について
・四月二十日（土）午後二時、体協会議室にて開く。招集通知は四月八日に発送する。

② 会費納入状況

・昭和三十七年度新入会員は約一五〇名、滞納者は毎年七百名位、その中で長期滞納四十名位、あとは短期滞納である。なお滞納者の層について調査したい。

③ 会員名簿について

・新年度で名簿を作成したい。出来れば会員には無料配布したいが、経理面から検討する。
なお「山岳」の送料を節約する

画しています。

日本工営の遭難は新聞にてご承知の如く大変残念でしたが、渡渉の際の注意として、ボート（丸木舟）を使うときに浮袋をつけること、今後の日本隊に実行して頂きたいことです。

四、ヒマラヤン・クラブのこと

ヒマラヤン・クラブの Hon. Editor の Crowford 氏から来信あり、故伊藤氏の消息と日本のヒマラヤ遠征隊に関して原稿をまとめてほしいと云って来ました。今カトマンズで支部長は、エヴェレスト・マチャプチャリの Col. Wylie（ロバート大佐の次の駐在武官としてイギリス大使館に居ます）がしていますが、先日バキスタン大使のレセプションの折に山の話をしました。又 P・アウフシュナイダー氏とはデリーにいられる早大の先輩鳴原氏と共に、スイス・ミッションで逢いました。その他カルナリ・プロジェクトの国連側代表のスイス人 Mr. Spinner 氏か、イギリスの Maj. Spring-smith とか、ヒマラヤン・クラブの会員は十名位当地にいます。会員名簿はなかなか面白く、世界中の一度でもヒマラヤに來た人はほとんど出ています。

いずれ又ゆっくりとお便り致します。会の皆様に宜しく。

（二月二十二日、カトマンズにて松田宛）

☆ ☆ ☆

栗駒山とその南麓

（宮城県側）

の温泉群

村上 金吾

一関から瑞山（みずやま）行のバス、厳美溪（げんびけい）で下車、徒歩一時間余で達古袋（たっこだい）に泊る。

翌朝七時半出発、長倉、立石、谷地小屋から蛇沢をのぼったが、道が不明になり、高畑沢を越えて小衣森（こころもり）大森の肩をゆく林道を探してあつた。やがて鞍掛沼から七九メートル三角点の方向に至る古い道に出た。

その道から駒ノ湯にゆく分岐点も見えず、左にはいたが、ところどころ倒木があったりして道はひどく荒れていた。

そして遂に駒ノ湯まであと二キロ足らずのハツカミ沢上流で道が不明となり、何回も戻って探したが、つい見つからず、あきらめてハツカミ沢左岸の道を裏沢合流点まで下り、そこからはみ坂をのぼった。沢筋でアブの多いのに悩まされた。

大変な時間と体力の浪費を敢てして、日が暮れて駒ノ湯について、

本来ならば駒ノ湯に入るには、栗駒町から行者滝までバスがあり、それから柳沢開拓地を経て駒ノ湯までトラックや小型車などの通るよい道路ができていた。翌朝七時半出発、表、裏、中央

コースのうち未経験の中央コースを登ることにした。地図にも載っていない新湯は、裏コースと中央コースの分岐点から約十五分裏コースをはいったところにあるが、十数年も前から無人で浴そうがあるだけ、駒ノ湯で浴客から聞いた話だが、新湯はクマ、サルなど動物達の浴場になっているということだった。

中央コースは数年前新設されたもので、栗駒山南面の尾根筋を登る。三コース中傾斜の緩い割合に所要時間は少なくてすむ。水場は乏しいが、頂上近くキンコウカの群落がつづく。

栗駒山頂には白塗の大標柱が立ち、そのあたりに数人の登山者が屯していた。

須川温泉に下る道を右に見送り、左道下の残雪のへりについて駒形根柢前を経、虚空蔵山には登らず鞍部を西側に越してゆく。緩やかな草原、ところどころ池があつてミズガシワなどがある。草原の下が石の多い道、石廻コース。その下がブナの原生林で、嶽山国有林である。

ひと沢越してゆく湯浜温泉、男達がいま釣ってきたイワナを焼いているところに着いて泊めてもらった。いまだき珍らしく素材で静寂な感じのよい温泉である。旧盆で湯治客が帰ったあとなので閑散、イワナのご馳走が秀逸。

翌朝また七時半に出発して、はじめは二迫（いちのきはさま）川の左岸、右岸を、それから川を離れてくだる。ヒキガエルの多いのに驚く。

やがて白糸ノ滝の下に出る。そこから北へ一キロばかり、低い山を越して再び二迫川のほとりにおりと、湯ノ倉温泉である。

こころもりと静かなところのようだ。休んでお茶をのんだだけで湯湯（ぬるゆ）に向う。はじめ川の右岸、ついで左岸に越え一時間足らずで湯湯に出た。

ここには製材所、住宅、商店などもあつて、山の温泉場ともいえるところのようだ。

以上動物温泉の新湯を含めて栗駒五湯の探訪は終わった。最初の予定では栗駒五湯をまわってから、国見峠を越えて鬼首（おにこべ）五湯を探るつもりだったが、峠の道は荒れていること、折角峠を越していても、荒湯がこれまた荒れて人もいないということで、予定を変更し、湯湯からバスで座主（ざす）へ出て、そこで鳴子（なるこ）行バスに乗り換えた。

鳴子で、さらに鬼首行バスに乗り換えて、轟（とどろき）温泉下車一泊。翌日近くにある吹上温泉の間歇泉、宮沢温泉を一まわりして再びバスで鳴子に出た。

鬼首五湯のうち荒湯は明治四十三年の水害で崩壊埋没したまま、蟹沢温泉は数年前ダムによって水没し現在はない。神滝（みたき）には時間の関係で立寄れなかった。

玉造八湯は鳴子が中心をなす大温泉街で、うだるような暑さの中に、団体客などがひしめいていた。もとより山の温泉と同列にとりあげるところでもないから割愛した。（三七・八・一二一六）

ため、できるだけ支部所在地にまとめて小包発送したい。

④山岳保険について

・登山者を対象とする。個人及び団体保険がある。本会で保険代理店契約は適当でないが、知らない人のために会報等を通じて P・R することは良い。特に学生層に呼びかけることにしたい。

⑤テンジン来日について
・四月下旬～五月上旬に来日するかもしれないので連絡中、外務省にも協力願っている。

⑥信濃毎日新聞社「登山講習会」について
・信濃毎日新聞社九十周年記念として標記の計画あり、山岳協会協力することになったので、JAC としても援助したい。

・期日、八月下旬（三泊四日）二回実施
・場所、北アルプス上高地・穂高岳を中心として行う

⑦登山技術研究委員会
・体協補助金により、左記講習会を実施する。

(1)期日、四月二十七日～三十日
(2)場所、月山

(3)参加人員、約四十名
(4)参加者、西穂講習会、ヒマラヤ関係の者を対象とする。

⑧文部省主催「登山講習会」
(1)期日五月十五日～十八日

(2)場所、谷川岳天神平
（関西は大山）

(3)参加者、高校・中学在職教員

東海支部

猪を食う会

鈴鹿連峯紹介を兼ね
尾高温泉懇親会報告



尾高温泉から電ケ岳

川喜田社太郎

終点尾高温泉の美朝荘には、八日本山岳会東海支部云々Vの看板が鮮やかに、この催しの肝煎りをしていた伊達氏に迎えられる。渡辺氏がすでに来ておられ全く恐縮。日高、川喜田、須賀氏等も湯の山から桑名からと続々御着。

「地図になし、人に訊いても知らない、一体此所はどこなんだ」と異口同音。尾高温原・尾高温泉は標高五百五十メートルの田舎鉱泉。疎林、草原が点綴する釈迦ヶ岳の広い裾野にある。三重県宮キャン

プ場にも近く、寮や簡易宿泊施設も逐次建つことなどを説明案内不備のおゆるしを乞う。

「萩の十」を注文しておいたのに良いのが獲れず、「紅葉」に化けたお詫びで開会、——我々不明の致すところ慚愧に堪えぬ。しかし山鯨には当り外れがあり、同じ雌でも悪い奴は

句が強く鍋にならぬとの説あり、季節で八葉喰いVと称する点、猪も鹿も美味いだけではいとうなつかれる。

とまれ俳人ならぬ来賓に、無理しないで良かったと自省する。ただ沢山居るのが煩である。

閑話休題、一須賀支部長の歓迎の辞につづいて、来賓の皆様から御挨拶をいただき、全員が自己紹介して懇談に入る。

日高氏の「学校山岳部の在り方・高校山岳部の問題」、「山荘・ハムッソリーニの愛人ベタッチが駆け込んだお話」、渡辺氏の「鈴鹿の山との縁」、川喜田氏の「ヨーロッパの山と山道具」日本には世界中の山道具が来ているお話：等々談笑の中に聞き流らすまいと傾聴。支部の話題も豊富、なかなかつ

愛大生薬師岳遭難と東海地区の学校山岳部の状況、統一的連合団体への諸問題など当面のことに助言を得られ幸であった。

紅葉鍋に熱燗で宴は高潮、霞々として興は尽きない。しかし速來のお疲れをと十二時に閉会。明くれば桃の節句。好晴ながら午後から雨という地元狛師の予報で山麓ハイキングとする。十時出発、縁結びで有名な尾高観音・尾高山引接寺に参詣、小間い槍の森に一条の棧道が通じ、正面の高みに白い六角堂が奥深く見える。川喜田氏はスケッチ、他の面々は写真、ただしかなる引接を祈ったかは知る由もない。

キャンプ場を一巡し焼合谷を涉り、草里野の広潤な台地へ。この一帯は朝明川の旧河床、千草石の採石場、伊達氏が「ポスト坐石のほとんどが千草石」と説明。「安くまけるから買わないか」と灯籠師が奨めるが勇士は現われなかった。

き上げ、奥には鎌ヶ岳が、「雪嶺の大三角を鎌と呼ぶ」、誓子名鈴の通りである。北は竜ヶ岳まで燦々としている。野梅咲く千草の村をよこぎり、絵之高原を望む。中ほどに湯の山ゴルフ場、東洋一のロープウェイも見え、やがてクラブに到着、大食堂でランチオンとなる。春光を浴びつつ歩いた二時間余の散策にビールが佳い。

悠々談笑するうち果せるかな国境がぼやけ、雲のとぼりが下りてくる。雨、今年初の春雨である。三々五々しつとりと語らいつつ湯の山駅へ。そこで別れを惜しむ。時に二時半ごろであったか。

(塩田良伸記)

参加者V
日高信六郎、渡辺公平、須賀太郎、川喜田社太郎、森本恒夫、平松 伝、波多野光雄(以上三氏津峠の会)
伊達忠雄、塩田良伸、神谷真吾、村井喜一、村井重夫、柏瀬清一郎、石原国利、藤森元夫、中世古隆司、山田義郎、高井利恭、落合八重子、後藤静枝。以上二十名

○ ○

▼第二回登山技術講習会
日本山岳会東京支部
一、目的、正しい登山のための基礎技術の向上
二、日時、五月十八日・二十日
三、場所、谷川岳東面、マチが沢、芝倉沢・白毛門附近
四、宿泊所、理大山荘
五、人員、二十五名
六、費用、二、八〇〇円
七、係員、芳野越夫、関口周也

・講師として個人資格で木下、金坂理事参加の予定
⑨大学山岳部の在り方について
・現在名古屋地区で学生連盟を組織する動きがある。追々に全国的な組織により指導の方向に進む必要がある。

⑩東京支部「講演と映画の会」計画について
・自然愛護をテーマに左記の通り実施したく協力要請あり
(1)日時、六月十二日
(2)場所、虎ノ門久保講堂

四月理事会(臨時)
十一日・ルーム

出席者松方会長、三田副会長、渡辺副会長、理事折井、山崎、辰沼、金坂、皆川、村木、古沢、竹田、監事野口、評議員青木、松田武藤

マ議事と報告
①通常会員総会について
(1)JACヒマラヤ計画予定と経過を報告。
(2)大学山岳部の在り方についての所見発表、その他担当事項につき打合せを行う。
②「山日記」新年度の事業計画について
③山岳診療所について
・例年通り山岳医療連絡会により運営をはかる。

以上

東京支部会務報告

二月二十七日(水)臨時役員会

一、来年度事業計画

イ、講演と映画の会(六月)

ロ、登山ゼミナール

ハ、技術講習会

ニ、スキースクール

ホ、懇親山行

二、新年度役員推選

出席者 石原、神谷、佐藤、村山

沼倉、山崎、折井、錦織、芳野

岩佐、坂倉、関口、中、野萩、

三枝、山口、富田

三月六日(水)役員会

一、新年度役員推選

二、新年度予算案の件

三、第三水例会休会の件

四、婦人部復活の件

出席者 折井、今井、関口、中、

芳野、岩佐、篠原、野萩、坂倉

山口、宇田川、富田

三月二十日(水)臨時役員会

一、四月総会の打合せその他

出席者 折井、安彦、錦織、坂倉

野萩、関口

四月三日(水)役員会

一、四月総会の件

二、役員追加推選及交代

三、六月講演と映画の件

四、会計報告

五、藤木九三氏レリーフ建設の件

出席者

石原、折井、安彦、坂倉、錦織

岩佐、篠原、関口、鈴木、山口

富田

氷の山技術講習会

神戸山岳連盟主催の登山技術講習会が二月八日から十一日まで兵庫の氷の山で開かれ、招かれて参加した。ベースを千本杉の神大ヒュッテに置き、参加者は約四十名

八日、八鹿から丹戸泊り。九日、

東尾根をへて千本杉ヒュッテ入り

十日氷の山頂上から二ノ丸にかけて稜線上で氷雪上技術。十一日丹戸へ下山という行程であった。

こういう機会でなければと出かけた氷の山はなかなか快適で、とくに十日は好天に恵まれ、楽しいスキー登山が楽しめた。例の裏日本の豪雪で、雪量も多く、九日の午後の雪洞構築の講習にはもってこいであったが、アイゼンやピッケルを使用する場所がなくもの足りなく感じた受講生もおられたのではないかと思う。夜は山登りのあり方、遭難対策などについて座談的に話をした。連盟の皆さんが、まとまって楽しい雰囲気を作っておられるのは非常に気持ちよかった。

神戸の津田氏をはじめ、何から何までお世話になった前田浩、坂上秀太郎両氏に厚くお礼を申し上げます。

(山崎安治)

一九六三年三月八日
帰国挨拶

本年一月十六日静岡を出発、三月七日帰静致す間、五十一日間各方面の御声援と御配慮に依り、中華民国訪問親善登山隊としての任務を、無事遂行出来ました事を厚く御礼申し上げます。

台湾に於ては計画通り、新高山、大霸尖山等を始め、快的な登山を致し、下山後は、各地、各方面を廻り挨拶、懇談、講演等を致し、親善の実を充分にはたす事が出来ました。

日本山岳会静岡岡支部
中華民國訪問親善登山隊

隊長 山本明三郎

隊員 佐野 敏郎

市野 弘

河村 栄二

杉山 晴信

鈴木 璋一

樋口 幸利

台中にて

日本山岳会関西支部
訪華友好登山隊

二月十八日マスホル(梅山)を出発した台湾山岳協会三名、関西支部十名、山胞(ポーター)十一名計二十四名は、老濃溪の渡渉をくり返し、新しい二ノ八日、新高山の登頂に成功しました。

今回の成功に一方ならぬ御支援を賜り隊員一同厚く感謝いたして居ります。

三月三日阿里山登山の途につきました。

二二五号訂正

誤 正

2頁5段 発拳を開 登拳を開始

12頁5段 ③現地小 ④現地小集

13頁3段 昭和三十 昭和三十一年八月

13頁3段 無謀な登山 無謀な登山

15頁4段 大森明洗 大森明洗氏

氏

二二五号おわひ

・前号一部会報の中に、印刷の手違いから、12頁一段目の、行間に不用のケイが沢山浮き出し

ているものがありました。お見苦しい点深くおわびいたします。

おことわり

・「回想の岳人」(2)

・「沼井鉄太郎遺稿」(続)は

紙面の都合により次号に掲載いたします。

昭和三十八年四月二十五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古沢 肇

電話 神田(四)八九五二番

振替口座東京四八二九番

頒価 二十円

東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技報堂

技報堂